大伴宿禰家持の鹿鳴の歌二首

一六〇二番

山彦の　相とよむまで　妻恋に　鹿鳴く山辺に
ひとりのみして

一六〇三番

このころの　朝明に聞けば　あしひきの　山呼び
とよめ　さ雄鹿鳴くも

大原真人今城、奈良の故郷を傷み惜しむ歌一首

一六〇四番

秋されば　春日の山の　黄葉見る　奈良の都の
荒るらく惜しも

大伴宿禰家持の歌一首

一六〇五番

高円の　野辺の秋萩　このころの　暁露に　咲
きにけむかも